

「三条市教育制度等検討委員会最終報告 地域説明会記録（第四中学校区）」

- 1 日 時 平成20年5月30日（金）午後7時～午後9時00分
- 2 会 場 第四中学校 体育館
- 3 参加者数 33人
- 4 報道機関 なし
- 5 教育委員会出席者
梨本教育委員長 松永教育長 古川教育部長、池浦教育総務課長、駒澤学校教育課長
- 6 説明会次第
 - (1) 開会あいさつ 梨本教育委員長
 - (2) 最終報告説明 池浦教育総務課長
 - (3) 質疑、意見等
 - (4) 閉会あいさつ 松永教育長
- 7 質疑、意見等の概要

発言者A

モデル校以外の小中一貫の形態 四中学区は、最後に説明のあった一体型、併用型、連携型のどれに当てはまるのか。

教育総務課長

教育制度等検討委員会の中では、一体型のモデル校として第一中学校区が、併用型あるいは連携型のモデルとして第三中学校区が示されている。それ以外の学校については、既存校舎をそれぞれ生かした中で、教員あるいは生徒が移動して連携を図っていく連携型を想定している。

発言者B

- ① **卒業式** 今、小学校6年生を終わったら卒業して、また新たに中学校に入ることになるが、4・3・2区分でいくと卒業式はどうなるのか。
- ② **制服** 中学校では、学生服を着ることになるが、こうなった場合、いつから着るのか。親としてお金のこととかも考えていなければならない。

学校教育課長

- ① 今、行っている教育制度、6・3制はそのまま残る。学習指導要領も手を付けない。当然、小学校卒業時には卒業証書も出て、それぞれ小学校、中学校の校長先生からもらう。9年間で1回の卒業ということではない。

教育総務課長

- ① 現在ある6・3制自体を止めるものではない。6・3制はそのまま、義務教育9年間で連続した中で、4・3・2区分で緩やかな連携を図っていくというのが目的であって、特区等を申請し、6・3制の制度自体を4・3・2制に変えてしまおうというものではない。

教育部長

もう少し説明すると、連携型というのが今の形態に最も近い形で、ある意味今とあまり変わらない形態といえる。一番変わるのは、一中学区で想定されている一体型であり、同じ校舎に

小学生も中学生もみんな入る形が考えられる。一体型が一番大きく変わるものだが、国の教育制度は変わっていないので、同じ校舎にいても小学校は小学校、教員の組織上も中学校は中学校であり、それぞれ校長先生もいるし、先生はどちらかの学校の先生である。

子どもも小学校へ6年行ったら別の中学校に行きたいというような場合もあると思うが、そういう場合も対応ができるようになっている。

その上で、小中一貫教育というのは、9年間を見通したカリキュラム、あるいは小学校・中学校の先生が一体となった教員組織としてとらえられて、中学校の先生でも小学校に行つて小学校の先生でも中学校で活動するようなことも想定している。

教育委員長

民間人の感覚で、お話ししてみたい。

まず、お子さんが井栗小学校に入る。そうすると井栗小学校に井栗小学校の校長先生がいて、井栗小の先生方がいる。そこで、お子さんを迎え入れてくれて、小学校の教育を6年間一生懸命する。6年間終わると井栗小学校の校長先生から卒業証書をもって、あとは中学校へ行きなさいということで、四中へ来る。ちょっと極端な言い方ですが、「この子、後は中学に渡したよ。」と一旦、ここで切れることになる。四中には、四中の先生がいて校長先生がいて、中学1年生から中学の教育をしましょうと、迎え入れてくれる。そこでは中学の教育をする。

具体的に分かりやすく言うと、小学校では、学級担任制で担任の先生はその子のことを何でも知っているが、中学に行くと、教科担任制で英語の先生は英語だけ教え、数学の先生は数学だけ教える、まるで違う。そこで子どもが、今までやってきた小学校の世界と、まるで違う中学という大人の世界にポンと入れられて、戸惑いが出てきたり、ちょっとついていけないという子が出てきたり、いろんな問題がそこに出てくる。いわゆる中1ギャップです。

これは三条だけではないけれど、ついていけなくて学校へ行くのが嫌になったり、いろんな問題が出てきたりするが、今度は子どもを主人公にして考えてみようということで、お客さんが子ども。その子どもが小学校1年生で入学してからの6年と、中1、中2、中3の9年間という義務教育を1人の子どもを中心に、小学校の先生も中学校の先生も一緒になって教育するというか育てるということを考える。この子にどうやって教えたら分かりやすく、中学1年生のことをマスターできるか、子ども達とも仲良くできるかということ、小学校の先生と中学校の先生と一緒に相談しながら、そのやり方を考え出そうというようなことをやる。

要するに、先生同士が情報交換しなければいけない。その子どものことを小学校の先生も中学校の先生も一緒になって知らなければいけない。勉強のやり方を研究する。あくまでもその子どもが主人公だ。

このシステムは、何のためにやるのかというと、先生にとっても、生徒にとっても、居心地のよい学び舎、これが小中一貫教育のねらいであると思うんです。

発言者C

連携のイメージ 4・3・2に分かれたときに、どうしても分からないのが、真ん中の3の扱いだ。最初の4は、説明によると、現行の1年から4年は、今までと変わらないんだと。後半の2も、今の中2、中3と同じ内容でいいんだらうというイメージはわく。中間の3のイメ

ージをどのように描けばいいのか分からず、質問もどういう観点でしようかと悩む。

発達段階に応じて、カリキュラムで真ん中の3の枠組みができるんだということは分かるが、ではどんな関わりを、どんな場所でどんなふうを持つ予定なのか。

そうしたときに、連携型だと教師と子どもが移動するとなると、おそらくストレスになる。なるべくストレスを減らすような方法を考えてくれると思うが、どんな手立てをしてくれるのか。送り迎えの交通手段があるのか。

今、クラスという母体があるわけだが、移動が多くなれば1つのクラス、居心地のいいクラスというものがなくなるのではないかなという気もする。真ん中の小5・小6・中1の具体的な生活を少しお話してもらいたい。

学校教育課長

小中一貫教育もしくは連携教育の中で、一番の目玉は、真ん中のところだ。真ん中の小学校5年、6年、中学校1年が一番大事なところだと思っている。先ほどの説明のように、小学校では学級担任制で、極端な言い方をすれば、朝から晩まで同じ1人の先生と関わりを持つが、中学校に行くと、教科担任制なので全部の教科で先生が変わる。

そのギャップが、子どもの立場になってどうなのか。先生方が毎日変わる、英語が新しくなる、部活動がある、友達ができるだろうか、そんな不安を子ども達は抱いて、学校に入ってくる。実際に自分のことを小学校のように手厚く、朝から晩まで見てもらえない。1時間ごとに先生が変わる。授業で教室も移動する。子どもにとって不安とストレスが中学1年生の前半、特にゴールデンウィーク後あたりに出る。そこを何とか連携したい。

例えば、小学校の5・6年のときに、何回か中学校へ行って、英語の授業を受けてみるとか、音楽の専門の先生から授業を受けてみるとか、あるいは自分たちの学校に、体育の専門の先生が来てくれて、跳び箱を飛んで見せる。そういうことによって、今度中学へ行くとあの先生に会えるんだということで、不安を少しでも解消してやりたい。

行事でも、生徒会と児童会の交流で、例えば、朝の挨拶運動に中学生が来て子ども達に声をかけてやるとか、小学校6年生が中学校に行って一緒に競技をやるとか、その学校で考えられることをいっぱいやって子どもの不安を取り除いてやりたい。

勉強もそうだと思う。中学校はテストがある。受験もある。だからきっちりここまでということで、チャイムが鳴ればやめないといけない。でも、小学校は、ある程度ゆっくりと1人の先生が45分の授業の中でできる。もう少しやりたいとなれば、次の時間でもちょっとやれる。中学校は先生が変わるから、もうちょっとやりたいときでも、やめないといけない。学び方でも、そういうところが小学校と中学校では違うと思う。

それを何とか少しでも緩やかに、ソフトランディングできるようにしてやりたいというのがこの一貫だ。

そこで、移動のことだが、私どもも本当に頭が痛い問題だ。理想は、同じ学び舎で子ども達と一緒にいる一体型だ。小中の先生方が同じ教務室で1人の子どものことについて、休み時間でも放課後でも情報交換ができる。これは理想だ。

しかし、残念ながら、財政的なこともあるし、校舎の問題もあるので、連携でやれるところ

からやることになる。例えば、スクールバスの配置、子どもの移動を短時間で済ませる工夫、その辺はまたこれからこれを導入しようということになったら学校の先生や地域の方の意見を聴きながら進めていかなければならないと思っている。

教育長

非常に難しい問題なので、私の方からも若干お話をさせていただく。

例えば、第四中学校の場合は、井栗小学校と保内小学校と旭小学校の子どもが、第四中学校に来ているが、井栗小学校の子ども以外は、旭小学校も、保内小学校もクラス替えは6年間行われぬ。そういうような環境で6年間を過ごす。旭小の子どもは、中学に入ると保内の子どもと井栗の子どもと一緒にいる。自分たち10何人しかいない子ども達が40人、50人の中に入ったときに人間関係がどうできるんだろうかという不安を抱くのだろうと思う。

これを例えば、5年生あるいは6年生の段階で、第四中学区の子供達、第四中学校のある場所で、一緒になって勉強したり、体育活動したり、音楽の勉強をしたりするような機会を1年間のうちに何回か積み重ねていくことで、中学に入ったときにそれまでの学習や体験が役に立って中学校へスムーズに行けるのではないかと、そういう環境ができて上がるのではないかと、4・3・2区分の3の部分である。

もう一つは、5年生あたりから学習内容が非常に論理的となる。筋道を立てて、いろいろ考える能力が求められるので、そういうところには、例えば算数の授業を中学の数学の先生が教えてくれたならば、算数を専門としていない小学校の先生が教えるよりも、子ども達にとってより分かりやすく、より理解が深まっていくのではないかと、思っている。美術にしても音楽にしても同じだが、そういう場をどうやって小学校の5年生あたりから与えることができるだろうかという一つの工夫だ。

中学の先生が小学校行くのか、あるいは保内小学校、井栗小学校、旭小学校の5年生か6年生が、ある時間帯、第四中学校の教室などに集まって、中学に入る前にもう仲間ができるような学級編成や勉強ができる、そういう工夫を各学校でもらうことで、一つの連携型、あるいは併用型の学習ができるのではないかと。

これから皆で、第四中学校区で自分たちの環境や条件をいかにしながら、工夫していければ、真ん中の区分の学年で非常に面白い活動ができるのではないだろうかという気がする。

発言者C

- ① **移動のストレス** 通学は徒歩で1時間以内という説明だが、一体型の場合は小学校の子どもも1時間かかるという可能性がある。そうすると、防犯上もスクールバスか何かでないと困難だと思う。併用型・連携型もやはり皆と一緒に動かなければならないから、移動手段としてスクールバス等でないとできない。カリキュラムを組むときにすごく複雑化して本当にできるのかなと、説明を聞きながら思ったし、子ども達がストレスを感じるんじゃないかと思う。
- ② **交流の方法** 教育制度等検討委員会の皆さんが一生懸命に考えて、これが理想だということだと思われていると思うが、実際の運用となったら大変だ。1年に何回か一緒に交流を持つということだが、1年に何回かだったら、皆で移動するのではなくて皆で遊びの時間を作っても交流はできる。そういうやり方もあるのではないかと。勉強の時間にそういう交流をして、子

ものストレスが解消して、成果を上げることができると思っているかも知れないが、別の方法でもできるのではないか。

教育部長

- ① 一体型になると、それまで地域に分散していた幾つかの小学校が1か所に集まる形が想定される。今よりもっと、遠いところの子どもの毎日の行き帰りのことを考えると、何らかの交通手段は十分に検討されるべきことだと思う。

例えば、現在でも下田地域は非常に広域だが、中学校は1つだ。1つの中学校にいくつかの小学校から卒業した子が通ってきているが、今は4キロメートル以上の生徒は、スクールバスで通えるようにしていたり、あるいは公共の交通手段について利用できるようなことも進めたりしている。そのような一定のルールといったこともあるので、遠いところは、スクールバスということも十分に考えられる。

連携型の場合は、今と同じように小学生は小学校に、中学生は中学校にということが基本となるので、通学は今とあまり変わらないと思う。先ほどから交流ということで、教員が行き来したり、子ども達が行き来したりということを想定して話をしている関係で、非常に不安が広がっているのかと思うが、どのように交流するか、何回交流するかということは、子どもにストレスがかからないような手段で行われるべきことだと思っている。

それが、年に数回になるのかあるいは週1回はあるのかは、これから一中学区、三中学区のモデル校も想定されているので、そういう研究の中、小学校、中学校のそれぞれのカリキュラムの中で、学習効果が上がるというようなことでしっかりと目的を持ってされることであれば、一定のお金をかける価値もあるし、バス等も考えられる。ただ、基本的にそんなにしょっちゅうバスで行き来することはないと思っている。

- ② それよりも先ほど、4・3・2の3のところは、非常に重要だという課長の説明等もあったが、基本的にはそこでの教育の質が向上するというふうにご理解いただきたい。

先進校の視察をしてきたが、そこでは小学校の先生が前で板書をして授業を展開し、その後ろで中学校の先生が見守りながら、学習がなかなか進んでいない子をいろいろケアされるというような光景も幾つか見てきた。そのようなことで、1人で授業をするときは、ともすればなかなかついていけない子に丁寧にフォローするというのも、ときにはできない場合もあるかもしれないが、このような小学校と中学校の先生がカリキュラムにのっかって、ともに授業をされると解消される機会も増えてくると思っている。

つまり、子ども達が行ったり来たりして疲れるというより、どちらかという教員に高度な連携組織を作ってもらい、常に2人でやるという訳ではないが、教育の質が向上することが期待できる。従来に比べて専門性の高い先生が授業されたりとか、あるいは同じ時間でも、ついていけない子も含めてより丁寧にやられるとか、あるいは協働で活動ができる。

あくまでも無理のない範囲で、しっかりと子ども達の実情とかカリキュラムを考えた上でやる。また、その実施に当たっても、先行している地域の事例を参考にする。よその地域での話を聞くと、非常に子ども達にも評判がいいということで、学力の向上にもつながっているというような話もたくさん聞いている。そういったことを期待して、子ども達にあまり負荷がかか

らず、移動がある場合も無理のない形で行うことも研究の対象になると思う。

発言者C

教員の負担 そうすると、子ども達の移動よりも教員の移動が負担になる。そうすると教員をもっと増やさないとだめだ。今だって、小学校でも中学校でも先生が大変な思いをして、教えている。その時間を割いていくということになると、やっぱり教員の数が多くなければできない。子どもよりも教員が交流して一生懸命に学校へ出向く形のほうが多くなるのか。

教育部長

子どもがしょっちゅう行ったり来たりするということは、現実的ではないというイメージでいる。ただ、常にそのような形態かということ、それは学校の実情によると思うが、効果的にやられるべきことだと思っている。

中学校の先生が小学校にも行くようになると、その分先生の負担になるかと思うが、そこは教員の新たな投入も必要であれば考えられることだ。それもやはり、先行されているモデル校の状況を見てと思っている。中学校の先生が、物理的に小学校に行ったりもするわけなので、そこは十分に考慮しないといけないと思っている。

学校教育課長

先進地の呉市の視察に行ったときに、現場の先生の声として、「やっぱり大変だ。大変だけでも小中一貫教育は、子どもが少しずつ変わっている姿が目に見えてくる。先生方も、子どもの変わっていく姿を毎日感じる。成長の姿を少しずつ感じる事が、むしろやりがいになってくる。大変だけれどもがんばろう。」こういうふうなことをおっしゃっておられる先生がいる。

ただ、そればかりには期待できないので、私どもも県と連携をしながら、いろいろな人的な支援をいただけるようがんばっていくし、市も独自に教員の補充等を図っていかねばならないと思っている。

今、現場の先生方いきなりそんなことを期待しても、「大変だ」ということがあると思うので、これからモデル校の先生方には実際に先進地を見て、理解を深めてもらったり、またそういった先生方の話を聞くことによって、肌で感じてもらったりとか、あと夏になったら先進地の先生を呼んで全体の研修で、先生方の意識を高めるとか、大学の先生から小中一貫教育についての理念等の学習会、勉強会、研修会も考えている。

発言者D

- ① **先進地での改善点** 先進的に実践されている他の市町村の取組の中で、子どもが良くなったというお話をされたが、良くなった点を具体的に教えてほしい。
- ② **先進地での実践** 先進地でされている小5・小6・中1の具体的な実践を教えてほしい。

学校教育課長

- ① 学力というとすぐ数値となるが、それだけではないということをまず理解いただきたい。狭い意味での学力ではなく、学力は生きる力、自分の考えを持つとか、友達と仲良くやるとか、発表ができるとか、いろんな意味での学力だ。

品川区で先進的にやっている日野学園は、18年に一貫教育を導入した。ここに国語、社会、算数、理科があるが、この学校は少しずつ上がってきている。国語では、48.7、49.8、

50.4、だいたい1点きざみで上がって、導入した18年が51.4、19年度には、54.5と3点ぐらい上がっている。ほかの社会、算数、理科もだいたいそんな数値が出ている。広島県呉市でも、同様な話を聞いている。

いじめ関係では、15年には20名いた不登校が18年には11名になったという数も報告されている。

- ② 5・6年生の具体的な取組ですが、一部教科担任制で、例えば6年生になったときに、算数と理科は2学期ごろからずっと同じ先生が教えるとか、中学校の先生が来て授業をしたり、行事では文化祭を一緒にやったりとか、体育祭を一緒にやったりとか、そういう報告されている。

発言者E

連携の形態 小学校と中学校の連携に関して1対1の関係ならすごくよく分かったが、四中学区は、井栗小学校と旭小学校と保内小学校の3つの小学校が四中に来る。中学校と小学校の1対1という連携はいいと思うが、3つの小学校にも同じようなことを同時にするのか。

井栗小学校は人数多いが、保内や旭は少ない。子ども達は、勉強のことはもちろんだが、やはり友人関係について、中学校に入れば友達ができるか不安に思っている。今の話を聞いていると、どうしても1つの中学校対1つの小学校というイメージしかわからないので、3つの小学校が同時にやる場合、どのぐらいの量でやられるのか知りたい。

学校教育課長

基本的には1対3と考える。しかし、いろいろ学校の予定等により、場合によっては1対1もあると思う。それは、一貫をやることになれば、これから四中校区の先生方でいろいろ話し合いをしながら、やれるところからやっていく。

比較的大きな学校と小さな学校がある中で、いきなり中学校に行き初めて顔を合わせるよりも5年生、6年生のときに少しでも交流していれば、「あの時会ったけど来年の4月になったらまた会える」といったこともある。この交流、連携の中に、少しでもギャップを埋める、ソフトランディングできるというのが大きな狙いだと思う。

発言者F

- ① **モデル校での実績把握** これから一中と三中はモデル校として小中一貫教育が始まるわけだが、小5・小6・中1のときの他校との交流がどのようなやり方で、どれくらいの回数でされて、子ども達にプラスになっていくのか。それとも逆にストレスを与えてしまうのかをよく見ほしい。

中1ギャップの原因の大半は、多分子ども達の人間関係で占めていると私は思う。年に何回かの交流で解消できていくのか。中学校に上がって他校の生徒と一緒にになるとき、それが今の状況とまったく変わらないことにならないのかをモデル校でしっかりと把握して次へつなげていってほしい。

- ② **老朽化の対応** 保内小学校にも言えることだが、施設の老朽化の問題がある。小中一貫を進めていく中で、それと同時に現在の施設はどんどん老朽化する。ハードの整備を三条市としてはどういうふうに捉えているのか。24年に全市導入というタイムスケジュールが書いてあるが、それ以降も老朽化はどんどん進んでいく。仮に四中学区で言えばどういうビジョンを考え

ているのかを説明願いたい。

学校教育課長

- ① 私たちも、子ども達のいろいろな心の動き、どんなふうを考えているかということ、モデル校を通してアンケート等をとって、それを集計して成果として上がっているのか、もしくはマイナス面があるのかということを検証していきたい。

教育総務課長

- ② 三条市の中で特に旧三条には、例えば三条小学校とか一ノ木戸小学校とか、かなり古いところもあって、学習環境として厳しい状況にある学校もあると認識している。ちなみに、この第四中学校区は、井栗小学校が昭和56年、保内小学校も昭和56年、旭小学校は平成12年、そしてこの第四中学校は平成2年に建設されており、三条市全体から見るといいレベルにあると思っている。

だからと言って何もしないでいいということではない。小学校、中学校というのは児童生徒が1日の大半を過ごす場であるとともに、学校開放とかで地域住民の方の交流の場でもある。それから、昨年中越沖地震があったが、場合によっては避難所にもなる。そういった意味で、三条市教育委員会としてだけでなく、三条市としても、学校施設というのは、非常に重要な施設だと思っている。学習環境の整備という視点だけではなく、防災、コミュニティーの場として必要なものだ。三条市は、財政体力が決して強い自治体ではないので、厳しい面もあるが、それぞれの優先度、重要度等を見極めながら適切に整備していきたい。

教育部長

先ほどの前半の質問で、子ども達の間関係という話があったところをもう少し補足したい。

先ほど、学級担任と2人で授業している先進地域の事例を紹介したが、このメリットは、授業だけではなく、子どもが本当につらい思いをしても、じっと我慢して誰にも言わないというような思春期特有の現象があるが、そういうところを鋭く教員の方々は感知しながら、「どうしたの？」などと声をかけられる。それに、1人でサーチライトを当てるよりも、2人でそういうお子さんを見れば、「ちょっとあの子様がおかしいようだけど」と小学校と中学校の先生が話し合っ、ちょっと話を聴いてみたらどうかという機会も増えていくのではないかと

思っている。

別の角度から言うと、中学校に整備されているスクールカウンセラー、心理の専門家も学校単位で配置されているが、小中の先生の連携が進めば、もちろんスクールカウンセラーの無理のない範囲で、小学校の子どもにそういった機会も増えるのではないかと

また、いじめ、不登校の背景にあるとも言われている発達障がいのある子どもへの支援も、特別支援学級に行ったり、通級による指導を受けられている場合はいいが、そこまでではないけれどもいろいろ心配な子どももいると思う。あるいは、保護者が「うちの子は障がい児じゃない」と支援を拒むこともあるだろう。そういう子どもにも丁寧に対応する必要があるが、中学校で途切れてまったく何もしてくれなくなったという悪い例もある。

小中一貫の学校の場合は、中学校の先生も小学校に行っ、そういう子どものことを小学校の先生といろいろ話をしているので、スムーズに小中学校の連携がとられて、必要な支援を受け

られるというメリットもあると伺ってきた。

そういったことで、学力の面だけでなく、子どもの内心とか人間関係の問題とかも、以前よりもより丁寧にできる可能性が広がるのではないかと考えている。

発言者G

リーダー等の職責 14ページに、小中一貫リーダー、小中一貫コーディネーターの指名とあるが、これは各学校のどういう方が当たるのか。校長、教頭、教務主任が当たるのか、あるいは学級担当をしているような先生が当たるのか。

学校教育課長

この方々が小中一貫教育の推進役となる。この第四中学校区は4つの学校からなるが、この連絡調整係となるので、4校の校長先生が最もふさわしい先生を選んでくるものと期待している。

なお、リーダーは中学校区で1人、コーディネーターは4校から1人ずつ出る。

発言者G

コーディネーターは、大変重要な役割を占めると思うが、実践している学校から来てもらうのではなく、四中学区の中の未知の先生がコーディネーター役として推進することになるのか。

学校教育課長

そのためにモデル校がある。モデル校以外の学校、第四中も含めてその後になるが、まずモデル校での先進事例、効果等が分かる。今後、先生方の研修会を予定しているが、先進地の現場で実践してこられたコーディネーターの先生を講師に呼んでの研修会も計画されている。

発言者G

学級を持っている先生が、そのコーディネーター役をするのは、今の多様化している先生方にとっては、難しいのではないかと、保護者として感じている。

教育部長

先進校へ行くと、自信を持って「我が校ではこういうふうになっている」と、あちこちから説明を聞いてきた。ある意味、今までにない、あるいは今までよりも進んだ形の取組をしていくのだから、より高度なシステムが組み立てていく必要がある。スタッフの数の質問があったが、スタッフの数でできることとできないことがある。その際は、その人員の中で何ができるか、研究も進めなければならない。無理のない形で、こういったことことができる、日程を合わせればこういったことできるといったことが蓄積され、ノウハウが積まれて、先行研究が参考にされていく。

子どもの負担にならないか、あまり無理に進められるのではないかと不安なんだと思う。そこは十分に配慮しながら進められなければならない。先進地へ行っても教育委員会がしっかりサポートしているのが印象的であったし、情熱を持ってやっていた。その上で私どもはやりましたと、自信に満ちた説明を受けてきた。

三条市においても、優秀な先生が大勢いるので、そうした高度なシステムでもきっとできると確信している。

学校教育課長

やはり、教務主任、研究主任クラスの先生がコーディネーターに当たるものと思う。モデル校においては、小規模校においては、学級主任と兼務することもある。これから研究が必要となる。

発言者G

子どもたちにストレスを与えないような方法でやってほしいし、教育委員会から各学校の校長、教頭に周知した上でコーディネーターを選んでもらうよう希望する。

教育部長

重要な意見であり、重く受け止めている。

発言者H

一貫校の学力 一貫教育の中1までの真ん中の部分は、大切だと感じている。先進地域では、学力が上がってきているとの説明があったが、中学生は高校受験がある。先進校の中学校2年、3年の学力においても、実際にプラスになっているのか。

教育部長

全国的には、まだ始まったばかりのところが多く、長いスパンでの成果をとったものはまだないが、着実に増えているのは事実である。三条市にも、どのようにやっているかといった問い合わせがたくさん来ている。検討委員会の最終報告は、全国で読まれている教育雑誌の別刷りで出版され、注目を集めている。

学力の向上はとても大事なことだ。受験勉強を詰め込みで夜何時までやるとか、四当五落などと言われるが、真ん中の3年間を中心に、義務教育の段階でしっかり基礎的な学力を付けることは、その後いい影響を及ぼすことが広く知られている。

先進地では、小中一貫をしているところは、小学校では中学校の先生が入ってきて教えてもらえると、期待も上がって、非常に人気が高まっている。地域としても学校を支えていこうと、地域と学校の連携も深まって、学校に投入される資源、大人の力が増えていくなど、いい循環が起きている。そうしたことも期待している。

学力の話も出たが、有名な大学に何人入ったことを誇る学校も多い。しかし、実態としては人間関係を形成する力が弱くて辞めてしまうなど、さびしい思いをして学生生活を過ごしたということも聞かれる。本当に人間としての基礎基本を培う9年間は、たくさんの教員によって様々な角度から内容を充実して、質を上げることによって、人間としての総合的な力、学力というのがしっかり身に付いていくことが期待される。

それはいくつかの先進地で口をそろえて言っている。だから、私どもも自信を持って進めているし、データ等は他のところからもいただきながら提供したい。

発言者H

学校単位の意識付け 説明のとおり、本当に勉強さえできればいいということではないと思っている。やっぱり生きる力とか、自分が本当に何をやったらいいのか自分で考えていく力とかは、小学校のときから親も先生たちも子にとって一番大事だというような観点で見えていくということを意識していかなければいけない。

急にそのときになって、学校とかシステムにまかせればそうなるというのは、ちょっと違う

と思う。普段、自分たちが暮らしていく中で、実際我が子を自分で見ていかなければならない。学校のこのシステムだけで子ども達がそうなるとは思わない。やっぱり、自分たち親がその意識を持っていかないとだめじゃないかと思う。

結果が出るのは何年も先のことから、今からもっと、親同士は学年に合った一番いい育て方を意識して考えていく場が必要だと思う。導入するまでの間に場づくりみたいなものをしていかないとだめじゃないかと思う。各学校単位で意識していくような働きかけが必要じゃないかというふうを感じる。

教育部長

生徒指導の問題、地域の学習といったことについても、小中一貫とは別に、引き続きしっかり取り組んでいかなければならない課題だと思っている。

小1プロブレムの問題、中1ギャップだけではなく、保育所から小学校へのことや、小さいころからの生徒指導の問題も、平行してしっかりと各学校で取り組んで、必要な連携は図っていただいてもよい。システムとして完成された形でなくても、そういったことは24年度より以前からも研究的にやることは十分に可能だと思うし、先行して実施されることを想定している。

一中や三中の取組でいいところは、うちの学区でもやろうというような意欲的な取組も期待をされる。これから本格的に導入されるかどうかは未定だが、このスケジュールから考えると、中途でもいいとこ取りでそういった問題に対処していくべきだ。小中一貫のいいところは、十分先行できるのではないかと思う。

教育委員会は、各学校でうまくいくように、しっかりと見て、また必要な指導をしていく、あるいは支援をしていかなければならないと思う。

発言者 I

① **中学校区の連携** 現時点の小学校と中学校のいろんな分部で、同じ学区なのに何の連絡も取り合っていない、まったく別のものになっているのが現状だと思う。行事一つとっても中学校の卒業式の前日に小学校の六送会があったりする。中3と小6の卒業生を2人持っている親もいる。そうなった場合、民間人はそんなに休みが取れないから、同じ1週間の中に「どっちを休めばいいの」というふうになる。そういうことは、小学校側が把握するべきだと思う。防犯パトロールだけが学区ではない。

そういうことで、小中一貫で中学校と小学校が連携することには、すごくいいことだと思うんです。学力だけではなくて、先生たちの交流も図れるし、保護者が同じ中でやっつけられるというのもすごくいいことだと思う。

ただ、それに向かっていくためには、現時点での小学校と中学校の連携を少しずつ進めていかないと、スムーズに進まないと思う。子どもは順応性があるから、制度が変わったところで、多分「今年からこうなんだって」と、結構受け入れることも早いと思うが、大人の方が6・3制でずっときているから、親の方が頭が固くて付いていけない部分がすごく大きいと思う。

であれば、進めていく小学校、中学校がきちっと24年までに連携がとれていける方向に持っていくために教育委員会からうまく指導をしていただく。小学校の先生の中には、授業や担

任以外の仕事になると何をしてもよいのか分からないという若い先生も実際にいる。

そういう現場の中で、小中一貫に向けて、コーディネーターがいて、いろいろ言ったところで、その末端の先生たちにまできっちりそれを把握してもらえるのかというところもあると思う。

- ② **学校からの情報発信** そこで、一中、三中での進み具合を逐一聞いていきたいと思う。興味がない親は知らないと思うし、ここにも来ていないと思う。実際そうなったときに、きっと保護者の方がバタバタすると思う。

だから、小学校も中学校も率先して保護者に向けて、そういう活動が始まりますということを知っていていいんじゃないかと思う。その場に教育委員会の方もいて、こういう質問にも答えてもらいたいと思う。

学校教育課長

- ① 行事の日程を組むにしても、なるべく小・中同じ校区同士、日程調整をして親が出やすいようにということだが、切実な思いだと思う。一貫教育はある意味、そういうことも含めているものだ。小学校では今こんなこととして、中学校ではそれを理解することによって配慮していく。中学校が今これだから、小学校は配慮していく。そういうことも含めていると思う。
- ② モデル校の実施状況や進捗状況を聞かせてほしいということだが、まだモデル校も正式には指定されていないし、今こういう説明会を進めている段階であり、今後そういったものが少しずつ皆さんの方に報告できると思う。また、学校にも説明会をしているが、終わった学校から学校だよりとか校長室だより等でそういったことが当然なされていくべきだろうと考えている。

全体の広報については、例えば今日の地域説明会については、市のホームページにも載せることになっているので、そういった広報を図っていきたい。